

令和元年6月26日現在

機関番号：84416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13898

研究課題名（和文）がん患者・家族の終末期における納得いく最期を迎えるための検討要因の解明

研究課題名（英文）Elucidation of examination factors to reach the convincing end of cancer patients' families

研究代表者

萬谷 和広 (mantani, kazuhiko)

独立行政法人国立病院機構（大阪南医療センター臨床研究部）・その他部局等・主任

研究者番号：60597730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、がん患者の家族が、「納得いく最期」を迎えるために考えておくべきことを、遺族調査を通して明らかにすることである。

まず、質的記述的調査から、最後の時の満足や後悔に至る構造と、それを構成する要因を明らかにした。具体的には、医療の側面、そして、生活や人生の側面の2つの側面における構造を示すことができた。その上で、明らかになった要因や構造を基礎に、質問紙郵送調査により、統計量とともに、年齢や性別などの属性と各要因、各要因同士の有意差を明確にした。その結果、納得いく最期の為に必要となる要因と構造の全体像とともに、特に患者と家族の関係性が大きな影響を及ぼすことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国の死亡者数は、今後、増加が予測され、多死社会を迎えるとされる。その死因の1つでもあるがんについても死亡者数が増加しており、今後、がん患者における如何に最期を迎えるかについては重要な課題である。そこで、本研究は、そのがん患者の最期に焦点をあて、「納得いく最期」につながる要因や構造を見出したことは、社会的意義が大きいと考える。

また、「納得いく最期」に関する社会的な課題は、非常に個別性が高いことから十分に解明されていないのが現状である。本研究は、その検討すべき要因についての一石を投じる学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is elucidation of examination factors to reach the convincing end of cancer patients' families.

First, from the qualitative research, we clarified the structure leading to the last satisfaction and regret and the factors that constitute it. Specifically, I was able to show the structure of the medical side and two aspects of life and life. After that, a quantitative survey was conducted based on the revealed factors and structure. The quantitative survey revealed statistics. And we clarified the significant difference of attribute and factor, factor and factor. As a result, an overview of the factors and structures needed for the convincing final period was clarified. And it became clear that the relationship between the patient and the family had a particularly big impact.

研究分野：医療福祉学

キーワード：遺族 がん患者 その人らしい生活 満足いく最期 納得いく最期 社会的支援 最期の時 終末期

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国では、今後、多死社会を迎えるとされている。日本人の死亡原因の1位である「悪性新生物(がん)」についてもその死亡数が増加する見通しでもあり、がんによる「納得いく最期」を迎えることは、今後の大きな課題と言える。

終末期においては、エンドオブライフケアあるいは緩和ケアなど、死に対する考え方、概念については周知されてきているところである。その中で重要とされていることが、「全人的ケア」である。全人的ケアとは、身体的側面のみならず、心理的側面や社会的側面といった、がん患者と家族の「からだ、こころ、くらし」全てに視点を置き、それぞれの側面を支援することである。

しかし、この中で、社会的側面においては、個別性の高い状況であることから、非常に不明確であり、先行研究においても、十分解明されていないのが現状であった。そこで、「納得いく最期」を迎えるための準備として、社会的な側面について、明らかにしていく必要性が考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、がん患者の家族が「最期の時を悔いなく過ごし、納得した最期を迎える」ために、考えておくべき必要な要因と、その要因の内容を構造的に明らかにすることである。特に、その中でも「社会的側面」に焦点を当て、その要因と内容を探っていく。

### 3. 研究の方法

本研究は、まず質的記述的調査によって、がん患者の遺族に対して、終末期そして死後を振り返り「良かったこと・満足できた事柄」、「悪かったこと・後悔している事柄」についてインタビューを行う。そのことにより、「良かったこと・満足できた事柄」、あるいは「悪かったこと・後悔している事柄」に至る構造と、その構造を構成する要因について明らかにしていく。

その上で、明らかになった構造や要因を項目とした調査票を作成し、質問紙郵送調査を実施する。そこでは統計量と共に、年齢や性別などの属性と、「良かったこと・満足できた事柄」、あるいは「悪かったこと・後悔している事柄」に係る要因との有意差、また、それぞれの要因同士の有義差を明らかにしていく。

### 4. 研究成果

研究結果においては、質的記述的研究で、終末期、最期の時における満足あるいは後悔に至る構造とその構造を構成する要因、質問紙郵送調査で、単純集計とともに、各要因同士の有意差を明らかにした。

#### (1) 質的記述的調査

質的記述的調査では、2つの構造とそれを構成する要因を見出すことができた。

1つ目は、【社会的要因を加味した医療の選択・決定】をカテゴリーとする構造である。この構造は、がんという疾患を抱え、進行する病態の中、どのように治療や療養を行っていくかといった医療の側面を反映した構造である。《満足いく医療・療養》の帰結に至るには、医療者との信頼関係が前提である上で、社会的状況を加味し、医療の選択・決定を行うことの重要性が見出された。

2つ目は、【患者が望むことの実施】をカテゴリーとする構造である。病気を抱えながら如何に生きるかといった、生活や人生の側面を反映した構造である。《質の高い時間や過ごし方》に至るには、患者が望むことを実施することや、また、患者と家族が時間や空間の共有し、愛情や心のつながりを感じるといった関係の構築が重要となっていた。

#### (2) 質問紙郵送調査

本調査では、調査票を339票配布し、有効回収数が145票(回収数42.77%)という結果であ

った。家族(遺族)の属性では、平均年齢 63.68 歳、患者を亡くした際の年齢の平均は 53.71 歳、性別は、男性 35 名(24.1%)、女性 110 名(75.9%)、故人との関係(故人からみた続柄)は、配偶者が 94 名(64.8%)と一番多く、次いで、子 29 名(20.0%)となっていた。故人(患者)の属性では、亡くなった年齢は、平均 60.77 歳となっていた。亡くなってからの期間は、平均 126.4 か月、闘病期間は、25.81 か月となっている。性別は、男性 86 名(59.3%)、女性 59 名(40.7%)で、原発部位では、大きな偏りはなかった。

終末期医療における満足度は、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせた、「満足」群で 86 名(59.3%)となっていた。満足度の高い群の特徴としては、患者(故人)と家族(遺族)の間に終末期医療に関する意見の一致について、関連が見られた。一致があったと思う 107 名(73.8%)においては、終末期医療の満足度が高いとする有意差が見られた( $P < 0.01$ )。

終末期の生活の満足度は、家族(遺族)においては「そう思う」、「ややそう思う」を合わせた、「満足」群で 61 名(43.6%)となっており、半数以上は、満足して最期の時を迎えられていないことがわかる。その中でも満足いく最期を迎えた特徴としては、一緒の時間を持てた( $P < 0.01$ )、人生について振り返ることが出来た( $P < 0.01$ )部分で有意差があった。罹患前の関係性において、満足いく最期を迎える事との間に有意差はなく、闘病生活の中で如何に家族と時間を過ごしたかが重要であった。納得いく最期を迎えるためには、患者と家族が向き合い、語り合い、自己決定していくプロセスが重要であることが明らかになった。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

萬谷和広「がん患者の家族における「納得いく最期」を迎えるために検討すべき要因とその構造」日本保健医療社会福祉学会誌 医療社会福祉研究(第 28 巻掲載予定)

〔学会発表〕(計 1 件)

萬谷和広「がん患者の家族の「納得いく最期」について 患者・家族の関係性を中心に」日本保健医療行動科学会、2019 年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。